

「フェミニズムの哲学」

二五〇〇年以上にわたる哲学の歴史を振り返った際、近代以降におけるごく少数の例外を除き、女性は哲学史に登場しない。アリストテレスやカントの著作に見出される「女性は男性ほど理性的ではない」という言明を持ち出すまでもなく、女性は不当にも思考するという営みから排除されてきたといえる。こうした伝統に抗するフェミニズムの哲学とは、ジェンダーの平等を掲げるフェミニズム思想における概念分析を通じてその理論化を試みる哲学的探求であると同時に、伝統的哲学に散見される性差別や男性中心主義を批判し、女性哲学者による哲学的貢献の再評価を図るフェミニズム運動でもある。

フェミニズムの哲学において、女性や性的マイノリティへの差別や偏見の是正といった中心的な問題意識は共有されているものの、その理論的立場や扱う主題、方法論は多種多様である。たとえば、第一波から第四波に分類される思想的運動を引き受けた理論構築やその洗練化に留まらず、フェミニズムの観点から哲学史や哲学的概念・問題へとアプローチするもの、フェミニズム理論における概念を分析するもの、「ケアの倫理」のような、フェミニズムの思想を背景としつつ、狭義のフェミニズムには収まらない動向も登場している。

また、日本哲学会は、2005年7月の委員会において、男女共同参画推進に関するワーキンググループを設立し、欧米各国に比べればやや遅ればせながらも、ジェンダーバランスの是正や女性が活躍しやすい学会運営に取り組んでいる。いまや新たな社会や制度を構想するにあたり、フェミニズムの視点は不可欠なものと言ってよい。本テーマレクチャーでは、多彩なフェミニズムの哲学の枠組みを概観したうえで、フェミニズムの観点から哲学を見直すこと、さらにはフェミニズムを哲学することはいかに可能かを考える機会を提供したい。